

W. S. モーム作

‘お菓子とビール’に関する覚書

(Some Notes on ‘Cakes and Ale’ by W. S. Maugham)

脇 田 勇

I. Preface

II. (i) 一人称小説

(ii) 人物描写——特に Rosie について

Bibliography

I. 序 文

第一次大戦と第二次大戦との間に、英文学には大きな変革が行なわれ、実験小説、観念小説が主流をなした時代があり、特に1930年代は自由主義と全体主義の対決が課題となり、政治主義的な文学が主流となった時期である。しかし Maugham はその主流のいずれにも属さず、独自の創作活動を続けたのである。モームの位置づけを困難ならめる原因は彼の創作態度にあると思われる。作家として主観的態度とか客観的態度とかの何れかに徹するわけでもなく、伝統的かと思えば巧みに時流と共に動く面もあり、唯物的でありながら、神秘的なものにひかれたりする。イギリス的な面もあるが、一般のイギリス作家達とは、考え方、書き方が違い、むしろフランス作家に類似点が多い。彼は、観念小説は、一種の journalism で、その観念に news value がある間だけの生命であり、実験小説は書く内容の貧困さを形式や技巧で粉飾しただけのもので、自分自身の空虚さを意識して不安になり、そのためこの様な工夫へ追いやられたかのように見えると考えていた。⁽¹⁾

所でこの期間は Maugham にとって自分の作家的資質に適合したもの

(1) W. S. Maugham : *The Summing Up*, Chap. 58.

を発見した時期であり、自ら story-teller に徹し切った時期でもある。この期間に六つの長篇と三つの旅行記と十一の戯曲と、就中最も注目すべき *The Summing Up* を書いている。Maugham は、はじめは Flaubert 的純粹客観描写の方法で小説に手をそめ出したのであるが、*Of Human Bondage* あたりから一人称小説を書き出し、前述の期間に生れた *Cakes and Ale* で、最も成功をおさめたとと言える。

Cakes and Ale は1930年3月から7月まで *Herper's Magazine* に連載され、9月 Heinemann 社から単行本として出版された小説で、当時Maugham 五十六才、円熟期の作品である。小説のテーマは、Preface の中にノートの形で次の如く記されている。

I am asked to write my reminiscences of a famous novelist, a friend of my childhood, living at W. with a common wife, very unfaithful to him. There he writes his great books. Later he marries his secretary, who guards him and makes him into a figure. My wonder whether even in his old age he is not slightly restive at being made into a monument.⁽¹⁾

(ある有名な小説家の追憶記を書いてくれと頼まれる。彼は私の少年時代の友人で、月並の女と同棲してWに住んでいる。女は彼に不貞を働く。彼はすぐれた書物を書く。後に彼は女秘書と結婚する。彼女は彼を護り、大物に仕上げる。老人になってからでも、大物に祭り上げられた事に対して、いささか仕末が悪いものでないかどうか。)

この小説はその Preface で Maugham 自身が語っている如く、モデル問題で物議をかもした作品である。Edward Driffield は Thomas Hardy であるし、Alroy Kear に擬せられる作家は二、三あるらしい(最も有力なのは Hugh Walpole となっている)が、前者については、二人の生涯の共

(1) W. S. Maugham : *Cakes and Ale*, Preface.

通点がつまらない二、三点だけあることを判断し得る程度に知っているに過ぎないし、後者については全く誤解で、この人物は色々な人達の性格を寄せ集めて創り出した人物である。ある作家からは上流社会憧憬病を、ある作家からは明けっぱなしな態度を、更にある作家からは運動競技自慢をかりてきたし、自分自身も相当混入していると明言している。我が国の文学作品でもモデル論争が時々起る。例えば三島由紀夫が‘金閣寺’という作品を書いた時、金閣寺放火事件の犯人の僧をモデルにしたものと批判をうけたのであるが、当の作者は situation として金閣寺炎上を取扱ったが、描かんとしたテーマの素材として扱ったもので、この犯人を documentary に創作したものでないと反駁したが、それは恐らく真実であろう。あらゆる広告戦術を用いた一人の作家を描く時、一人の作家を取上げる必要はなく、世間にはざらにあるし、世間の注意をひくために策略を弄することは何の不思議もない。このモデル問題では Maugham も悩まされたらしく *The Summing Up* の中でも、この種の問題の起るのは人間のエゴイズムのせいで、長所を書いた場合には起らないで、短所を書いた場合に起ると皮肉っている。

1959年 Heinemann 社会長 A. S. Frere との T. V. インタビューの時、作者自身、*Cakes and Ale* は自分の小説の中で、愛好する作品だと語ったと伝えられている。⁽¹⁾

John Brophy⁽²⁾ も Maugham の戯曲を除いた全作品の中で、この作品が後世の人々を最も楽しませるに相違ないと明言している。この作品は散漫のきらいはあるが、技法的にはきわめて巧みに構成されており、ことに話が過去の様々なエピソードに戻りながら、しかも明快さと勢いを失なわないところは注目に値する。これに比肩するものは、Maugham とは何の共通性もない作家 Henry James 以外に求めがたい。構成の複雑さは四人の主要人物中三人まで、職業的 story-teller であることから生じているが、その一人

(1) Richard Cordell : *Somerset Maugham*, p. 94.

(2) John Brophy : *Somerset Maugham*, 研究社, pp. 18~20.

Ashenden (Maugham) が全体の筋の運びを回想風に物語る。老後になって名声を博した Edward Driffield の死後、未亡人は夫より年下の作家 Alroy Kear に夫の伝記を書くことを委任する。Kear は資料を求めて Ashenden の所へくる。Ashenden は Blackstable で少年の頃、そして後 London に出て医学生だった時分、無名時代の Driffield を知っていたし、又彼の最初の妻 Rosie を知っていたのである。この真相は未亡人にも Kear にも歓迎すべからざるものであるが、この物語のうちで、最も納得のゆく感動的な物語の骨子を形成するのである。

この作品の特色の一つは、口語的物語形式で成功していることである。一頁一頁読むにつれて、話術のうまい職業作家から、内輪同志の集りで、自分が直接関係した体験を聞かされているような気がしてくる。この印象の盛り上げと、それに並んで欠くことのできない迫真性とは、始めから終わりまで、一点非のうち所がない。

何故この作品が Maugham の傑作と称せられ、作家自身が愛好する作品であると称するか。勿論文壇の裏話とかからくりを暴露したという興味、あるいは文壇人と批評家、それをとりまく上流社会への風刺と皮肉という面からの取上げ方も可能であるが、筆者はこの小論において次の二点にしぼってこの作品を考えて見たいと思うのである。

1. 一人称小説の技法
2. 人物描写——特に Rosie について

Ⅱ

(i) 一人称小説

Maugham がこの時期に自分の作家的資質にぴったりしたものを発見したが、それは作家自身が小説の中の一人物として登場して狂言廻しの役割を演ずる手法であった。元来こういう語り方は、話の信憑性を増す点に利点があるが、同時に話し手の側から言うと、自分の見聞しないことを話す必要が

なく読者の想像に委せ得る利便がある。Of *Human Bondage* を除けば、全て‘私’は主人公でなく、狂言廻し的な役割を演じていると言ってよいであろう。一人称小説に関する Maugham 自身の考え方は、彼の著作の諸所にうかがわれるが、試みに、短篇小説集第二巻の序文⁽¹⁾を引用して見よう。

There is one more point I want to make. The reader will notice that many of my stories are written in the first person singular. That is a literary convention which is as old as hills. It was used by Petronius Arbiter⁽²⁾ in the *Satyricon* and by many of the story-tellers in *The Thousand and One Nights*. Its object is of course to achieve credibility, for when someone tells you what he states happened to himself you are more likely to believe that he is telling the truth than when he tells you what happened to somebody else. It has besides the merit from the story-teller's point of view that he need only tell you what he knows for a fact and can leave to your imagination what he doesn't know.... But the *I* who writes is just as much a character in the story as the other persons with whom it is concerned. He may be the hero or he may be an onlooker or a confidant. But he is a character. The writer who uses this device is writing fiction and if he makes the *I* of his story a little quicker on the uptake, a little more level-headed, a little shrewder, a little braver, a little more ingenious, a little wittier, a little wiser than he, the writer, really is, the reader must show indulgence. He must remember that the author is not drawing a faithful portrait of himself, but creating a character for the particular purposes of his story.

(もう一つつけ加えたい点がある。私の物語の多くが、一人称で書かれていることに読者は気がつくであろう。それは、極めて古くから文学上

(1) *The Complete Short Stories*, Vol. II, Preface.

(2) (?-65) ローマの政治家、小説家。 *Satyricon* は散文に詩を随所に挿入した形式の社会風刺。十六世紀以降に流用した picaresque novel の先駆。

の因襲である。 *Satyricon* に於て Petronius Arbiter が又アラビアンナイトの中で多くの語り手が用いたものであった。その目的は勿論、信憑性を得るということである。何故ならば、誰かが実際に自分の身の上で起ったと述べていることを語る時、他の誰かに起ったことを語る時よりも、人々はより信ずるからである。なおその上、語り手の見地からすると、事実として知っていることを告げ、自分が実際知らず、又知ることを得ぬ事は読者の想像にまかせさえすればよいという長所のあることである。……書き手の私はそれと関連を持つ他の人間と同じく物語の中の一人物である。その人物は主役かも知れぬし、傍観者かも知れぬし、腹心の友かも知れぬ。とにかく、一人物である。この手法を用いる作家は、事実物語の作者で、もし作者がその物語の私をして、実際の作家の自分より、少し、物わかりを早くし、分別よくし、すばしこくし、勇敢にし、独創的にし、知恵者にし、賢くすれば、読者は愛着を示すに違いない。読者は、作者が忠実な自己描写をしているのではなく、自分の物語の特別な目的のために、人物を創造していることを、忘れてはならない。))

この Maugham の考え方を裏づけるように John Brophy も次の如く語⁽¹⁾っている。

‘彼は内面的観察にあまり関心を持たず、又意識の流れにも全然関心がない。……Maugham にあっては、一人称は物語という目的を達するための手段である。すなわち活動範囲を厳格且巧みに限定した機能的な技巧であり、それが使用されているのは、活字をかりながらも、まるで内輪で親しく語ったかのようにして呈示される物語に対しても、食卓で実際に語られる物語に適用されると同じ規則が適用されるからである。つまり、こういう物語は、語り手の身の上、あるいは目の前で、起ったことにする方が、人を首肯させるように見えがちなものである。短篇小

(1) John Brophy : *op. cit.*, pp. 35~36.

説を集めた全集 *Altogether* の序文に Maugham はこう書いている。「読者諸君にお願いするが、これらの物語の中のかなり多くが、一人称で語られているという事実にだまされて、それが私自身の体験だと思わないでいただきたい。これは真実らしさを添えるための技巧に過ぎない。」文体があのように饒舌であり、且話は人が語った物語として提示されているのだから、語り手なしですませたり、あるいは「私」は Maugham でない他の人間だということにしたなら、真実らしさをそこなってしまうであろう。いつも Maugham の作品においては、ある語り手が物語っているのだということが暗示されているし——彼は *Rain* は元来一人称で書かれたものだと書き残している——かつ、彼の最も特徴的な小説が、職業作家である語り手によって物語られていることは明白である。*The Razor's Edge* では語り手は Maugham という苗字である。*Ashenden* というスパイ物語集、*Cakes and Ale*, *Sanatorium* においては一人称の人物は作家で humorist の Ashenden である。彼の Christian name は Maugham と同じであり、彼の若い頃の生活の背景は Maugham のそれに似ている。しかし *Ashenden* は、自分の物語の外縁に立っている。彼は作中人物と交わり、いや恋をすることさえあるかもしれない。しかし彼等の人生の主要コースに影響を及ぼすことにはならない。

はっきり一人称小説の形をとった長篇小説は *The Moon and Sixpence*, *Cakes and Ale*, *The Razor's Edge* だが、短篇には *First Person Singular* に収められた六篇以外にも相当多数があげられる。

さて小説についての Maugham の考えを端的にとらえようとすれば *Ten Novels and Their Authors* の序章と Conclusion を繙くに如くはない。そこには彼の小説観、テクニク論が明確に展開されている。ちなみに彼の選んだ十人の作家と作品は次のものである。

Henry Fielding : *Tom Jones*

Jane Austen : *Pride and Prejudice*

Stendhal	: <i>Le Rouge et le Noir</i>
Balzac	: <i>Le Père Goriot</i>
Chartes Dickens	: <i>David Copperfield</i>
Flaubert	: <i>Madame Bovary</i>
Herman Melville	: <i>Moby Dick</i>
Emily Brontë	: <i>Wuthering Heights</i>
Dostoevsky	: <i>The Brothers Karamazov</i>
Tolstoy	: <i>War and Peace</i>

同書の Conclusion で、扱った小説家達の作家としての特徴を大体次の如く要約している。彼等は創造的本能、書くことへの情熱、独特なやり方で事物を見る個性、知性より強烈な感受性、想像力、自分達の創造した人物に同化して、その喜びや苦しみを共にする能力 (Maugham は *The Summing Up*⁽¹⁾ の中で、作家が多数の人物を創造し得るのは、彼が多数の人だからであり、彼の偉大さを計る尺度は、彼が内包する自我の数だと述べ、作家に必要なのは、共感でなく、感情移入だと言っている)、見たり感じたり想像したりしたものを力強く、はっきり具体的に表現する力、加うるに一種の靈感を所有していた。又彼等は共通して非常に率直に物語を語った。彼等は現代小説家のように種々な文学的トリックを用いず、事件を語り、動機をさぐり、人物やその職業や境遇について読者に知らせたいと思うことをはっきり語った。彼等は微妙さや独創性で感銘を与えようとしたり、驚かせようとしなかった。真理を語ろうとしたが、真理を特異な個性の歪んだレンズを通して眺めた。すぐ重要性を失う一時限りの興味しかない話題をさげ人類全部が永続的な関心を持つ主題——神、愛情、死、金、野心、羨望、誇り、善悪などを扱った。各世代の人が彼等の書物の中に目的にかなったものを見出すのは、このためであり、彼等の作品が我々を魅了し続ける個性を持つのは、彼等の異常な個性が明示する如く人生を見、判断し、描写したからである。作家が

(1) Chap. 61.

究極において与えるのは自己なのであって、これらの作家が時の推移と共に習慣や生活や考え方が変化しても、依然として魅力を持っているのは、彼等が特殊な力を持つ非常に特異な人間であるからである。奇妙なことに彼等は——Flaubert を除いては——stylist ではなかった。独創性を与えるための浅薄な技巧の蔑視・普遍性と永続性を持つ主題の選択、作家の特異な個性の重視などは、彼がくりかえして主張しているものである。

又序章の中では小説家の偏向 (bias) について述べている。小説家は自己の偏向に支配される。彼の選ぶ主題、創り出す人物、又その人物に対する態度は、皆この偏向に条件づけられる。彼の描くものは、彼の個性の表現であり、彼の内的本能、感情、経験の顕現である。いかに客観的であろうと懸命につとめても、結局は自分の偏向の奴隷になるのである。小説の書き方は大きく二つに分けられる。

(1) 神の如き全知者の立場から書く方法

(to write a novel from the standpoint of omniscience)

(2) 一人称を使って書く方法

(to write a novel in the first person)

(1)の場合は作者は読者をして話について来させ、人物を了解させるのに必要と考える全てを告げることができる。人物の感情や動機を内部から叙述できる。一人の人物が道を横ぎる時は、何故そうするか、その結果どうなるかを告げることができる。しかしこの立場で書かれた小説は、ぶざまで、冗長で、散漫の危険をおかす。Tolstoy はこの型の最高の作家であるが、しかし彼の場合ですら、此等の欠点が無いわけではない。作者は人物一人一人の皮膚にいくこんで行き、その感情を感じ、その思想を考えなければならぬが、作者には限界がある。創造した人物の属性を自分の中に持つ時はじめて可能になる。それがないと、外部から眺めるより仕方がない。そうになると、読者を信服させる説得力が欠けてくる。

小説の形体に強い欲望を持っていた Henry James が、この全知の立場の一変種ともいふべきものを考案したのは、此等の不利の点を意識したか

らであった。この場合作者は全知であるが、その全能の力は一人の人物に集中される。その全能の力は一人の人物に集中される。この方法の利便は、Henry James が疑もなく考えた如く、*The Ambassadors* の中の特異な人物 Strether が最も重要で、この人物が見、聞き、感じ、考え、推量することを通して物語が語られ、それに関係ある人物が説明されて行くので、作者は無関係なものは容易に排除して行けるわけで、小説の構造が必ずや引きしまってくる。その上書いている内容に信憑性を与えるということである。読者は段階をおうて、曖昧で不明確なものを明確化して行ける。推理小説的效果、あるいは Henry James が特に望んだ劇的效果を小説に与えるようになる。小説の大部分は、全知の立場から書かれたので、小説家はこの方法が創作上の困難さを克服する最も望ましい方法と考えたと思慮さるべきであろう。しかし第一人称で述べることは、Henry James 的手法におとらぬ真実性を物語に与えることができる。何故ならば、作者は自分が見、聞き、行動したことしか告げれないからである。この方法を用いたら十九世紀の小説は、もっと立派なものになっていたであろう。

一人称小説のもう一つの利点は、語り手に読者の共感を持たせるということである。この方法の派生した型が一時流行した書簡体小説の方法である。各の手紙は一人称で書かれているが、手紙は夫々別人の書いたものである。この形式は強烈な真実性を持つ。それがよしんば Baron Münchhausen⁽¹⁾ の話の如くありそうにもないことであっても、Kafka の *The Castle* の如く恐ろしいものであっても、語られていることが事実起った事件の感じを持たせる。しかし反面欠点もある。それは往々にして饒舌になり、余り関係のないことを含んでくるということである。しかしこの形式の傑作をあげるならば *Clarissa*⁽²⁾, *La Nouvelle Héloïse*⁽³⁾, *Les Liaisons Dangereuses*⁽⁴⁾ 等である。

(1) (1874—1945) ドイツの詩人。牧歌に才能を見せた。

(2) *Clarissa Harlowe*, Richardson の作。十八世紀イギリス小説の代表作。

(3) Jean-Jacques Rousseau の作。1761年出版。貴族の娘と庶民出の家庭教師の恋物語。

(4) Laclos の作。1782年出版 18世紀のフランスの代表作。

一人称小説の欠陥を免れながら、しかもその長所を生かした方法、それは Herman Melville の *Moby Dick* である。語り手は作者自身であるが、彼は主人公ではない。すなわち作者は自分の物語をしているのではない。作者はその中の一人物で、登場人物と多少の関係がある程度の立場である。この物語の傍観者の立場にある。ギリシヤ悲劇のコーラスの如く、目撃する情景を熟考している。彼は慨き、助言はするが、事件のなりゆきを支配する力を持たない。語り手と読者とは、物語の人物、その性格、動機、行動に対する共通の関心で結びつけられ、語り手は創作の人物について自身の持っていると同じ親近感を読者にいだかしめる。作中人物に読者が親近感を持つのに役立ち、真実性を加えて行く手法は明らかに推奨されるべきものである。大体以上の如き考え方が開陳されている。

さて *Cakes and Ale* において、読者が、とっぴな話の展開、山場、もしくは、いきをつまらせるようなスリリングな場面を求めるならば、失望するであろう。作者はあくまでも舞台廻しの役を演じ、主役ではない。それにも拘わらず、読者は最後までその担々たる筆致にのせて運ばれて行く。技巧の極地と言ってもよいかも知れない。語り手の一人称の眼を通して、読者は作中の人物の動きを知らされる。語り手はストーリー展開の要因とはなっておらず、傍観者の立場で、自分の見た人物の動きを読者に伝える。強いて主役と結びつく点と言えば、Blackstable 時代の Driffield 夫妻との交流又は London に出てから、Rosie との間に性的関係が生じたこと等であるが、それとてこの物語の発展を左右する要素とはなっていない。描写の方法が回想形式をとり、現実から回想へ再び回想から現実へと巧みに話が進められ、いやおうなしに読者を作者のペースにひきこんで行く巧妙さを感じさせられる。一人称形式をとったことで、この物語のリアリテイが一段と加わって行くということを、作者も意識したし、読者も痛感させられる。

(ii) 人物描写——特に Rosie について

序文に述べた如く、Thomas Hardy をモデルにしたと言われる Edward Driffield, Hugh Walpole だと言われる Alroy Kear, Amy Driffield, 及びその salon をとりまく上流階級の群像が戯画化されて、Maugham の風刺と皮肉は鋭くその虚像を描きだして行くのであるが、それは Rosie という一人の女性を浮彫りにするための手段で、実は小説の焦点が Rosie にしぼられて、はじめて光を放ってくると思われる。その意味で、Rosie をいかに描いているかを実証することが、この作品の鑑賞の上に絶対必要なことと思われる。

Cakes and Ale は Ashenden の回想を中心に話が運ばれて行くのであるが、その回想の中に Driffield の最初の妻 Rosie がでてくる。もとは酒場の女給で Driffield との間に子供ができたため結婚したのだが、性的に放縦な女で、Blackstable 時代は勿論 London に引越してからも、色々な男と関係する。Ashenden もその一人である。この銀色の太陽のような感じの女 Rosie は天真爛漫そのもので、動物的な自然さの持主である。相手が自分を望み、自分も相手が好きだから、一緒に寝るのである。それ以上の何物もない。それで相手が喜び、自分も喜ぶことができれば、それでよいではないかと言うのである。刹那的、享乐的な人生観である。自然であり、天衣無縫である。だから男と寝たことは、女の心にも身体にも何の影も残さない。Rosie の生活は常に明るく、こだわりなく、豁達である。それのみならず、彼女に接する人間は男も女も皆この魅力のとりことになってしまう。少年時代の Ashenden と一緒に夫の Driffield から自転車乗りを習う所から始まって、彼女が本当に好きだった Lord George Kemp (ジョージ且那) に死別し、余生を相変らず明るく New York 近辺の Yonkers に送っている最後まで、実に作者の筆の上に生き生きと躍っている。Maugham の描いた数多い人物の中で、最も鮮明な印象を刻みつけられる人物である。

Rosie という性格を見事に書きあげただけでも、この小説は書く意義があったようである。事実、序文の中でも、Maugham は相当長い間この女性を頭に描いていて、それが次第に熟してきた結果、めったな材料には使えないと思うようになったのである。Rosie にかくも鮮かな具象性を与え得たことは、作者にとって満足だったに違いない。Maugham がこの小説を自分の最も愛好するものと述べているのも、うなずける。

Rosie がこの小説の主演であるという考えを M. C. Kuner⁽¹⁾ の小論から引用して見よう。

In *Cakes and Ale* Maugham chose to stress character rather than the plot: he painted a triptych, with Rosie, a former barmaid, as its center. Far from behaving like the nymphomaniac Freudians accuse her being, Rosie has a sane and wholesome, if unique, attitude toward sex. Regarding the act as inconsequential and impersonal, almost as a man might, she bestows herself on her admirer of the moment with a simple and unaffected kindness that attaches no obligation to the favour; because she is emotionally uncomplicated she is unafflicted with the disease of possessiveness. In contrast to the scene-provoking females commonly encountered in fiction (and in life), Rosie is a rare and tangy barbiturate that cannot be taken too often. It was thirty years before Maugham could hit upon a story into which she might satisfactorily fit and through her he was able to prove one of his representative themes: those capable of disregarding convention are the true heirs of freedom.

(*Cakes and Ale* に於ては Maugham は筋よりも、性格に重点をおこした。彼は昔のバーの女給 Rosie を中心に、三面続きの絵を画いた。フロイド学派の人達が非難しているように、色情狂として行動して

(1) *The World of Somerset Maugham*, ed. by Klaus W. Jonas, Maugham and the West by M. C. Kuner, p. 82.

いるものでなく、独特な存在かも知れぬが、性に対して、正常な健康な態度を持っている。まるで男のようにその行為はつまらぬ非主観的なものと考えて、彼女は那场限りの彼女の愛人に、彼女の与える恩恵に対して、何の責任も持たせない。単純なきどらない親切をもって彼女の身体を与えるのである。彼は情緒的に複雑でないので、所有欲という病気に悩まされていない。小説や（あるいは実生活に於て）普通出くわす騒ぎを惹き起す女達とは対照的に、彼女はそうしばしば飲むことのできない稀に見る強烈な鎮静剤である。三十年もかかってやっと Maugham は彼女が立派に当てはまりそうな物語に思いつき、彼女を通して、彼の代表的なテーマの一つを解明することができた。それは因襲を無視することのできる人達が真の自由の遺産相続者であるというテーマである。）

又 Maugham が虎視眈々発表の機会を待っていた一女性が Rosie という形でこの小説で実現した経緯を Laurence Brander は次の如く解明している。

They (Mrs. Barton and Amy Driffield) were artificial in their lives and caricatured in their presentation. Rosie is in complete contrast. She is one of the most real women in English fiction because she is natural and, like the girl Maugham had known, she is beautiful and good. It is Rosie who raises the novel from a satire of Victorian society and a Hogarthian picture of literary life in Edwardian London... When he was "seized with the desire to write about an old, distinguished novelist, who, somewhat to his exasperation, was cosseted by his wife, and after his death used by her and others for their own glorification," it occurred to him "that by making Rosie his first wife I had the opportunity I had so long wanted." It was a moment of genius for it gave him the opportunity for which all his training and craftsmanship had waited.⁽¹⁾

(1) Laurence Brander: Somerset Maugham, p. 135.

(Barton Trafford 夫人や Amy Driffield はその生活が作為的であり、その表現において戯画化されている。Rosie とは完全な対照をなしている。Rosie は自然であり、Maugham の知り愛したモデルの少女の如く美しく善良なるが故に、英国小説の中でも最もリアルな婦人の一人である。ビクトリア社会の風刺、エドワード王時代のロンドンにおけるホガース的文学生活の描写からこの小説を高めているのは Rosie に外ならぬ。……妻から寵愛されていて、死後は自分達の榮譽の為利用されているのを見て、作者は激昂するのであるが、その著名な老作家について書きたい欲望にとりつかれた時、〈Rosie をこの大家の第一番目の夫人にすることにより、かねがね狙っていた機会を果たせる〉と考えついた。それは天才の腕の見せ所であった。というのはあらゆる作家としての訓練と手なみが待ちかまえていた機会が与えられたからである。)

Ashenden が Edward Driffield に始めて会ったのは、十五才の時、Blackstable に於てであった。物語は、Ashenden が Alroy Kear と共に、未亡人の Amy Driffield を訪問し、伝記の資料を提供する運びになるが、第五章から場面は作者の少年時代に逆戻りする。その頃 Driffield の妻となっていた Rosie は、少年の眼に、どちらかという大柄な金髪の女の人という印象を与えたに過ぎなかった。しかしその微笑は少年の心にも魅力的に映ったのである。この少年は *Of Human Bondage* の場合と異なり clubfoot (えび足) のような身体障害者でなく、健康な少年として描かれている。Maugham の手法の一つとして、人物の外観を仔細に記す特徴があげられるが、それは内的なものを暗示する上に大きな役割を果たしていることが多い。少年の眼に映った Rosie は次の如く述べられている。

She talked with a kind of eagerness, like a child bubbling over with the zest of life, and her eyes were lit all the time by her engaging smile. I did not know why I liked it. I should say

it was a little sly, if shyness were not a displeasing quality; it was too innocent to be sly. It was mischievous, like that of a child who has done something that he thinks funny, but is quite well aware that you will think rather naughty, he knows all the same that you won't be cross and if you don't find out about it quickly he'll come and tell you himself. But of course then I only knew that her smile made me feel at home.⁽¹⁾

(彼女がむきになって話す様子には、ちょっと子供が元気一杯にはしゃぎ廻るといったところがあり、眼はいつもうっとりするような微笑で輝いていた。私は何故か知らぬがその微笑が好きだった。ちょっと狡いと言ってもいいかも知れない。もっとも狡いと言えば不愉快な性質を連想し易いが、彼女の微笑はおよそ無邪気だった。むしろ茶目と言った方が当るかも知れない。つまり、面白がってやったことだが、みつかれば悪戯をしたと言われることよく知っているが、同時に又、本気で叱られることのないこともよく知っていて、もし早く見つからねば、寧ろ行って自分で話すつもりでいる、そんな時の子供の微笑に似ていた。いうまでもないが、その時は彼女の微笑が私を気楽にすると感じただけである。)

少年の眼にも Rosie が素姓のよくない女であるが、船乗り連中や殊に俗悪で話にならない Lord George (ジョージ旦那) などと関係したとは思いたがらないし、言葉に Blackstable アクセントがあり、h を時々おとしたりするし、彼女一流の文法で少年をびっくりさせるが、それでも彼女が好きでたまらなかつたのである。

Rosie は自分の女給としての遍歴を平気で語るのである。少年の伯父の牧師館の女中 Mary-Ann は少年を Driffield 夫妻に近づかせまいとしているけれど、Rosie の天衣無縫さには引きつけられていて「あたしは何だかよく

(1) Cakes and Ale, p.p. 65~66.

解りませんが、あの女には好きにならないではいられないものがありますね。かれこれ一時間近くも居たでしょうが、ちっとも威張ったところがないのですからね。これだけは、はっきり言えます。……本当のことが解って見れば、あの女にしたって世間の人達に較べて、ちっとも悪くはないんでしょう……。」と言わせている。

第五章から第十章まで、少年時代の回想が Driffield 夫妻を中心に展開し、第十章でこの夫婦が多くの借財を残して Blackstable を脱走したことが記され、一応回想は中断され、第十一章は現実に戻る。Driffield の無名時代のみっともない事件を、晩年のひどくお上品な様子と考え合わせて見て、おかしくてしかたがないとちよっと皮肉の笑を洩らしている。伝記を依頼された Alroy Kear はきれいごとの伝記を作ろうとしているが、Ashenden に「紳士と作家と二股かけるのは、なかなか難しいぞ」(It's very hard to be a gentleman and a writer.) とつかれる。つまり Alroy は Rosie をどう扱うかに困る。それに対して「それは脛の古傷という奴さ」(The skelton in the cupboard) と一矢を報いられる。Rosie は、精神的にも肉体的にも経済的にも Edward Driffield を破滅させるに足る悪影響を与えたし、不幸な結婚であったことは事実であるが、Edward Driffield の傑作が全て Rosie と同棲していた時代に書かれたという事実はどうしようもない。Alroy は「僕はあの人の最初の妻君があの人作品に及ぼした影響を一概に無視することができないような気がする。」と言う。

第十二章から再び回想に入り、聖ルカ病院附属医学校の学生として London に出ていた時代にさかのぼる。二十一才の時である。その頃再会の機会を得た Driffield 夫妻を土曜日ごとに訪ね、文芸の世界に足を踏み入れて行く。これは Maugham が聖トマス病院附属医学校にいた時代の現実が語られているわけである。当時 Rosie は三十五才位であった。Ashenden に映った Rosie の姿が画家の Hillier の画いた彼女の portrait を通して次の如く語られている。

She glowed palely, like the moon rather than the sun, or if it was like the sun it was like the sun in the white mist of dawn. Hillier had placed her in the middle of the canvas and she stood, with her arms by her sides, the palms of her hands toward you and her head a little thrown back, in an attitude that gave value to the pearly beauty of her neck and bosom. She stood like an actress taking a call, confused by unexpected applause, but there was something so original about her, so exquisitely spinglike, that the comparison was absurd. The artless creature had never known grease paints or footlights. She stood like a maiden apt for love offering herself guilelessly, because she was fulfilling the purposes of Nature, to the embraces of a lover. She belonged to a generation that did not fear a certain opulence of line, she was slender, but her breasts were ample and her hips well marked. When, later, Mrs. Barton Trafford saw the picture she said it reminded her of a sacrificial heifer.⁽¹⁾

(彼女は光を放つのだが、その光は白く、太陽より月の感じであった。もし太陽だとすれば、白い朝霧を通して見た太陽の感じであった。ヒリアは画布の中央に彼女の立姿を描いたのであった。掌を外側に向けて腰を手当て、頭をそらして気味にして、首と胸の美しさを効果的に見せた姿勢であった。思いがけぬ熱狂にどぎまぎして喝采に答えている女優のような恰好だったが、どこか非常に初々しい、なんとも言いようのない春めいた感じがあって、女優に比べるのは全然見当違いだった。このあどけなさは油脂顔料や脚光とは縁のないものであった。むしろ恋を知りそめた女が、大自然の目的を實行するという自覚から、少しも悪びれずに恋人の抱擁に身体を委ねる様子を思わせた。彼女の時代はある程度の豊満さを恐れない時代であった。全体としてほっそりしていたが、乳房は豊かに、腰は円かった。後に Barton Trafford 夫人がこの絵を見

(1) *Ibid.*, pp. 177~178.

て、犠牲に捧げる、まだ仔を生んだことのない若い牝牛を連想させると言った。)

ついに Ashenden は Rosie と一夜を共にする関係にまでおちいる。こんな関係に入る前に、Ford, Harry Retford, Hillier 等と関係があったかと問いただすと「そんな事は言っこなし。好きは好きなの。それはあなたもご存じでしょう。あの人達と一緒に遊びに出ると面白いんですもの。だけどそれだけのことよ。」と何のわだかまりもなく答える。アムステルダムの商人 Jack Kuyper との関係に嫉妬を感じて頼ねると次の返事ではぐらかされる。

“Oh, my dear, why d’you bother your head about any others? What harm does it do to you? Don’t I give you a good time? Aren’t you happy when you’re with me?” “Awfully.” “Well, then. It’s so silly to be fussy and jealous. Why not be happy with what you can get? Enjoy yourself while you have the chance, I say; we shall all be dead in a hundred years and what will anything matter then? Let’s have a good time while we can.”⁽¹⁾

(‘まあおかしな人。何も他人のことでくよくよすることないじゃないの。別にあなたにとって、それがどうってことないんだし。いつも面白く遊んであげているでしょ。あたしと一緒に遊ぶの面白くないの?’ ‘いや。’ ‘なら、それでいいじゃありませんか。いらいらしたり、やきもちを焼いたりするのはお馬鹿さんよ。あなたはあなたで楽しければ、それでいいじゃないの。楽しめる時に楽しんでおくものよ。百才まで生きるわけのものじゃなし。死んでしまえばそれまでじゃありませんか。今の中にせいぜい面白く遊ぶことよ。’)

この間に Rosie が Lord George と駈落ちした事実を知る。第二十三章で再び Alroy Kear と二人で Blackstable の Driffield 邸訪問の現実に戻

(1) *Ibid.*, p. 201.

る。夫人は、Rosie が夫を不幸にした不倫の女であったし、若しあの女が捨てて逃げ出さなかったら夫は一生涯その重荷に堪えなければならなかったし、誓ってこの様な地位に上ることもできなかつたと Rosie を責めると Ashenden は次の様に反駁し、Rosie を弁護する。

“You don't understand,” I said. “She was a very simple woman. Her instincts were healthy and ingenuous. She loved to make people happy. She loved love.” “Do you call that love?” “Well, then, the act of love. She was naturally affectionate. When she liked anyone it was quite natural for her to go to bed with him. She never thought twice about it. It was not vice; it wasn't lasciviousness; it was her nature. She gave herself as naturally as the sun gives heat or the flowers their perfume. It was a pleasure to her and she liked to give pleasure to others. It had no effect on her character; she remained sincere, unspoiled and artless.”⁽¹⁾

（‘あなたはお解りにならないのです。’と私は言った。‘彼女は非常に単純な女だったので。彼女の本能は健康で、全然けれんというものがありませんでした。彼女は人々を幸福にすることを愛したのです。彼女は愛を愛したのです。’ ‘あなたはそれを愛とおっしゃるのですか。’ ‘そうですか、では愛の行為と言い直しましょうか。彼女は天性愛情のこまやかな女でした。誰かが好きになると、その男と寝ることは、彼女にとって全く自然なことだったので。彼女はそのことを深く考えるようなことは決してありませんでした。それは不道徳というようなものでなかったのです。好色とかいうものでもありません。それは彼女の天性だったので。恰度太陽が熱を与え、花が香を与えると同じように、全く自然に彼女は彼女の身体を与えたのです。それは彼女にとって楽しいことでしたし、彼女は他人に楽しみを与えることが好きだったので。それは彼

(1) *Ibid.*, p. 249.

女の人格に何の影響もありませんでした。彼女は依然として誠実で、純真で、無邪気でした。)

不倫の女を何故 Edward Driffield が許していたかの説明は次の如くなされる。

“I think I can tell you. You see, she wasn't a woman who ever inspired love. Only affection. It was absurd to be jealous over her. She was a clear deep pool in a forest glade into which it's heavenly to plunge, but it is neither less cool nor less crystalline because a tramp and a gipsy and a gamekeeper have plunged into it before you.”⁽¹⁾

(こう言ったらお解りでしょうか。つまり彼女は色情を刺戟するような女ではなかったのです。ただ可愛いくて堪らなくなるだけです。彼女について嫉妬するのは馬鹿げたことでした。譬えて言うと林間の清らかな池のようなもので、その中へとびこんで水浴するのは何とも言えず楽しいことですが、それはあなたより先に放浪者や、ジプシーや猟場の番人がとびこんで水を浴びたとしても、その冷たさ、清らかさに何の変りもないのに似ています。)

Driffield 夫人は駈落ちした Rosie は十年前に死んだと噂に聞いて信じているのだが、実はこれはまちがいで、Ashenden が演出の仕事で New York に出かけた時、計らずも夫 Lord George に先立たれ今や七十才をこえた Rosie と再会するのである。Ashenden は彼女と Lord George の米国への脱出の経緯を持ち出すと、何もかも思惑がはずれて、二、三日したら逮捕状が出そうになっている George から米国行をさそわれたのであった。彼女はくあたしはあの人をたった一人で——しかも恐らく一文なしで、はるばる遠い所へ行かせることができなかった。今まであんな派手な暮らしをして、自

(1) *Ibid.*, p. 250.

分の邸に住み、自分の車を乗り廻していたんですもの。あたしは苦勞することは平氣でした。> とうちあける。更に Ashenden は George のどこが好きだったのかと問いただすと、彼女は壁にかけてあった夫の米国へ来てすぐ位に撮った写真を見て、<あの人はいつもこんな風に立派な紳士だったのですもの。> (He was always such a perfect gentleman.) と答える幕切れは、非常に象徴的である。

普通一般のもモラルからすれば背徳的と思われる Rosie がかくもあざやかに描かれ、しかも読者の共感を呼びおこす秘密には実は根拠があったのである。米国 Purdue 大学教授で、Maugham の友人であり、研究学者の一人でもある Richard Cordell 氏の *Somerset Maugham* の中の *Cakes and Ale* の項から、その事実を探ってみよう。

この作品の中心人物は Rosie でモデル (original) は Nan と言い、Maugham がかって愛した女性であった。この小説に出てくる牧師の伯父夫妻、海岸、店、Blackstable (実は Whitstable) の居酒屋、その町の道、London の下宿のおかみは皆現実のものである。しかし主要人物の人柄やその背景は変えられている。中でも一番うまく変貌させているのは Rosie である。本来の Rosie の姿——心温まる野獸性、いたずらっぽい笑、計り知れぬ善意と親切、冷静さ、美しさ、特に金銀の皮膚、カードの巧みさ、不倫の関係——はこの小説に余さず記されている。1930年この小説の発刊の時、二人の著名な小説家のモデル問題で、この作品は問題作 (*succès de scandale*) となったが、Rosie のモデルに考えつく人はなかった。Thomas Hardy と Hugh Walpole についての喧々囂々たる騒ぎに作者はほくそ笑み、一方 Whitstable では Rosie が誰かを考える者はいなかった。実際には、Rosie は酒場女ではなく、素姓の正しい立派な人物の娘で、その美しさで London 社交界でも有名であった。この小説の出た時、Rosie はまだ生きていて四十才位であった。彼女は二度結婚しているが、一度は芝居の演出家と、もう一度は有名な貴族の息子とであった。二番目の夫は後に英政界の大物となっ

た。Maugham と Rosie の終生の友人の某は、1929年に Maugham が今だに Rosie に愛情を感じていたので、完全に身分をかくす為、必要な変貌を加えたのであると述べている。

Cakes and Ale の序文の中で Thomas Hardy や Hugh Walpole のことは忌憚なく語っているが、Rosie の身分を思い当たらせるような発言はしていない。ただ若い時代、Rosie という道徳的に墮落しているが美しく、節操の不足にも拘らず善良な夫人と密接に関係したと述べている。Rosie の思い出は長く彼の記憶に残り、創作の中に描き出そうと思っていた。小説の人物にあるシンボルを見出そうとする批評家にとって、Rosie は一つのシンボルである。しかしその象徴的意味が何であろうと、Rosie は特異なものである。Maugham の特殊なものへの偏向が神話とか象徴を高く価値づける現代批評家の一部をかき乱している。著者は最初短篇にこの材料を用いようと計画した。しかし Rosie を描き出すには、短篇では足りぬことに気がついた。*Of Human Bondage* の折目正しい style と異って、*Cakes and Ale* は人物がよく描かれ、口語体を巧みに駆使し、構成の立派な作品である。しかし著者が愛する作品の一つとしてあげる理由は、Rosie の描写に満足しているからである。Maugham と Rosie (実は Nan) との恋愛はこの小説の出る十五年以上前に終末をつけていたが、彼女の美しさ、親切、暖かさ、不倫の思い出が未だ消えやらず残っていた。Nan は教育はあったが知的な人ではなかった。序文の中で 'She is the most engaging heroine I have ever created ... she could never have recognized herself in my novel, since by the time I wrote it she was dead.' と言っているが事実上、この作の十八年後に死んだのであった。彼女自身はその詳細な描写から自分であることがわかったであろう。

彼女の身分をかくそうとした別な理由は、二番目の夫がまだ生きていたことであった。1960年に於てもまだ生きていた。彼は勿論作中の George Kemp の様な人ではなく、米国へ移住もしていない。Nan は米国ではなく、

英国の美しい田舎の邸宅に晩年住んでいた。

もう一つ面白い事実は *Cakes and Ale* はその舞台となった Whitstable (作品では Blackstable) において憤怒の渦をまきおこしたことである。Rosie Gann という名前を使われた Gann 一族は、1930年頃 Whitstable の半ばを領する地方の有志であったが、Rosie Gann を売笑婦にしたことを憤慨したし、又 Kemp 一族も数多く居て、自分等が風刺されたといきり立った。市民の一人は、小説の中の人物と実在の人物と呼応する一覧表を作り回覧し、Maugham のこの作品は許し難きものときめつけたのである。

M. C. Kuner が Maugham and the West ⁽¹⁾ の中で分析した Maugham のテーマに関する見界は、Rosie 理解への鍵を与えるものと思われる。Maugham は彼の集めた材料から種々の小説を形成したのであるが、彼の全ての作品の中心思想として一貫する三つの主題がある。第一の支配的テーマは '報いられざる愛情' (unrequited love) のテーマである。第二は外観と現実のくい違い (discrepancy between appearance and reality) である。第三は世間の非難と戦う不覇な人間 (non-conformer who battles a disapproving world) である。

第一は当事者を滅す悲劇、例えば *Of Human Bondage* における Mildred に対する Philip の不幸な情熱、*The Narrow Corner* における Erik の Louise に対する情熱、*The Painted Veil* における Walter の Kitty に対するそれらである。

第三の場合この反抗は芸術によってなされ (*The Moon and Sixpence* では Charles Strickland は物質的な財産を捨て去り、絵画の天職を追究する) あるいは幻想によってなされる。(例えば、*The Razor's Edge* の Larry は宇宙の意義を知りたくて、富より英知を求めて時を費すのである。) 如何なる形を取ろうと反抗者は Maugham には興味つきない題材である。運命を自分の手に握り、自分自身の好きなように生活を形成して行く人々にひかれると

(1) The World of Somerset Maugham, *op. cit.*, p. 38.

告白している。注意すべきは、このような因襲に挑戦する人々は常に男である。彼の考えから判断すると、男だけが自分の夢の実現の為に、自分の身を犠牲にすることができるというのであろう。

さて第二のテーマであるが、彼の小説においては、法律と教会の柱とも言うべき人物がほとんどきまって盗人であったり、詐欺師であったり、酒呑みであったり、或るい姦通者であったりする。反対に、法網をくぐる人間が慈悲の権化であったり、反対に不貞の女が親しみ深い心の持主であったりする。 *Cakes and Ale* の Rosie は決して貞女ではないが、この小説の中で最も魅力に富んだ人物である。これに反し Driffield の二番目の夫人 Amy は礼節のお手本のような人間だが、終始読者をいらだたせ、心を乱すのである。

更に Kuner は Maugham の描く女性の二つの型を考えている。その一つは、社会は認めないが、彼女等の愛する男達に慰安と理解を与える浮気な、気立てのよい女達である。だらしのない服装をし、自分も人も生かす処生観 ('live and let live' philosophy) を持ち、親切と寛大な気持の持主である *Cakes and Ale* の Rosie はこういう創造人物中のピカーである。癩患者で盲目の絵画きの世話をする *The Moon and Stxence* の女主人公ポリネシア人の Ata, Simon が最後に彼女を捨て去っても、私心なく Simon を愛する *Christmas Holiday* の裁縫娘や、自分が Larry の人生において何の価値もないことがわかり、あきらめて、もっと安定性のある生活を求めるまでは、Larry との生活を楽しく設計する *The Razor's Edge* のフランスのモデル女 Suzanne 達は、皆愛らしく、優しい。全ての場合、これ等の婦人達は普通人ではない。売笑婦であり、原住民であり、あるいは Bohemian である。因襲が彼らに懲罰を加えるがために、それだけの理由で Maugham は彼女らに寛大の保護を加える。

第二の型は、恋人であると共に友人となり得る婦人達から成立っている。 *Of Human Bondage* の Norah は Philip に母性愛を与えるのみならず、Mildred が再び現われると、いさぎよく Philip を渡しやる。Norah の原型

とも言うべき *The Magician* の中の Susie は自分の愛する男がよりつまらぬ女に惹きつけられている時に黙って忍び耐え、彼のロマンチックな愛情を彼女の心の平静さを犠牲にして促進させてやりさえする。 *The Narrow Corner* にあらわれる Mrs. Frith は自分の幸福を夫の気まぐれのために犠牲にすることによって、彼に対する信頼感を示している。たとえ夫が失敗者であろうと、批評の矢から保護されねばならぬ子供じみた天才として彼の事を考えている。すべての Maugham の描く寛大な婦人達は母か売笑婦である。

以上の分析はたしかに肯綮に当たっていて、全く共感を覚えるのであるが、Rosie について更に考えてみると、この章で詳述した Maugham のかつての愛人の像がこの範疇の上に overlap しているのであるまいか。更に一步を進めて考えると、彼の人間観そのものに根拠を持つものと考えたいのである。人間性の矛盾をありのままの姿で肯定して行く人間観⁽¹⁾——そこに Rosie という女性を考える足がかりがあると信じたいのである。

John Brophy も *Liza of Lambeth* の Liza と Rosie とは Maugham 作品の主要人物の中で、臨床的検討によって成功をおさめた、ただ二人の女性であると激賞している。 *Cakes and Ale* においては、Rosie の呑気な寛容さが徐々に物語に浸透し、はじめの章では、Alroy Kear の自己欺瞞と恥知らずな処生ぶりが冷笑的に述べられているが、終り近くなると作者の態度は柔らいで、彼をむしろ滑稽な人物と変貌させている。

(1) Cf. 小樽商大「人文研究」, 第23輯 *The Enigmatic Somerset Maugham* 及び第25輯 *Maugham's View of the Short Story in 'Points of View'* (拙稿)

Bibliography

Texts

- Cakes and Ale, Heinemann, 1955.
- The Complete Short Stories, Vol. II, Heinemann, 1959.
- The Summing Up, Heinemann, 1960.
- Ten Novels & Their Authors, Mercury Books, London, 1963.

Reference Books

- The World of Somerset Maugham, an Anthology ed. by Klaus W. Jonas, Peter Owen Ltd., London, 1959.
- Laurence Brander : Somerset Maugham, a Guide, Oliver & Boyd, Edinburgh & London, 1963.
- Richard Cordell : Somerset Maugham, Heinemann, 1961.
- John Brophy 著 : サマセット・モーム, 研究社英文学ハンドブック。
青木雄造 訳
- 上田 勤 著 : Maugham, 研究社。
- モーム研究, 中野好夫編, 英宝社。
- モーム研究, 後藤武士, 増野正衛編, 新潮社モーム全集第三十一巻。

